

アタシとバカと大切な 時間

シェリー

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

それは明久×優子の小説です。

まだ中1なので、うまく書けているか、わかりません。

誤字などがたくさん入っていると思います。

誤字やアドバイスなどは教えてください。

できるだけ毎日書こうと思います。

まだまだ初心者です。よろしくお願いします！

目次

振り分け試験	1
キャラクター紹介	5
真実	10
優子の気持ち	14
強化合宿の怪しい影?	17

振り分け試験

優子 side

今日は振り分け試験の日だ。

毎日頑張つて勉強したから大丈夫だと思う。

AM9:00 教室にて

先生「振り分け試験、開始です。」

カサツとテスト用紙の音がした。

以外と難しいけど、多分いける。

自分に向かって「大丈夫、大丈夫」と心の中で言っていた。

でも急にお腹が痛くなってきた。とても痛い。

病院に行きたいけど、席をたつたら、テストは無得点。

ということは、アタシはFクラス行き。それは嫌。せっかく勉強したんだからAクラスに行きたい。

PM1:00

テストは終わった。やっと家に帰れる。きずいたらお腹は痛くなっていた。自分で

は緊張かなと思っただけ、まさかそれが全ての始まりだったとは、あの時のアタシは知らなかった。

PM5:00 家にて

優子「ただいま」

帰ったらお母さんがアタシを迎えていた。

母「おかえり優子ちゃん。試験はどうだった？」

優子「Aクラスには入れると思う。そういえば秀吉は？」

突然お母さんが表情を曇らせた。

母「秀吉はお医者さんに行ったの。」

優子「具合でも悪くなっ」「さあ優子ちゃん。今日は何を食べたい？」た：え？」

お母さんが急に話題を変えた。

アタシ、変な事言ったかな？

優子「：：ネギト口丼が食べたいな。」

母「そうなの。じゃあお母さん、お買い物に行ってくるわね。」

そうやってお母さんは家を飛び出た。

どうしてなのかはわからないけど、すごく嫌な予感がする。

PM6:00

お母さんと秀吉が帰ってきた。なんだか二人とも悲しそう。でも秀吉がアタシと目が合った瞬間、二人とも明るく振る舞い始めた。

母「あ：優子ちゃん。あ、す、すぐ夕飯作るからね〜。」

秀吉「そ、そうなのじゃ。きよ、今日のご飯はネギトロ丼らしいのう。た、楽しみなのじゃぞ。」

P M 9 : 0 0

ご飯も食べて、勉強をして、寝ようと思つて部屋を出たら、なにやらコソコソとリビングから話し声が聞こえた。

リビングに行つたらお母さんが泣いていて、秀吉も暗い顔をしていた。

母「ゆ、優子ちゃん。まだ起きていたの。早く寝なさい。」

優子「何で泣いているの？」

母「何でもないわよ。気にしないで」

そこでたぶんアタシの我慢の限界がきたんだと思う。アタシはそこでキレた。

優子「ねえ、何でアタシに話してくれないの!?!アタシは知つちやいけないの!?!アタシは何でも受け入れるから教えて!それともアタシに対する意地悪?そうならそうと言つてよ!」

お母さんも秀吉も困っていた。

でも、お母さんは教えてくれなかつた。

キヤラクター紹介

木下優子（きのした ゆうこ）

今回の小説の主人公。

2―Aクラス次席

召喚獣は黒いうさぎの耳と赤と黒のチェツクのワンピースに洋風の刀（オリジナル）腕輪の能力は一瞬で相手の召喚獣を凍らし、相手にかなりのダメージを与えるが、自分も点数が200点引かれる。（オリジナル）

英語、数学、そして現代国語が400点越え。

明久がFクラスからAクラスに上がったことを凄いと思い、尊敬している。弟の秀吉とお母さんに何かを隠されていることを凄く不満に思っている。

吉井明久（よしい あきひさ）

2―Aクラス

優子のが好き。

木下秀吉（きのした ひでよし）

2―Fクラス

医者に行っており（理由はまだ不明）、振り分け試験を受けなかったため、Fクラスになつた。

母親と一緒に優子に何かを隠している。

坂本雄二（さかもと ゆうじ）

2―Fクラス代表

Aクラス並みだが、とある目的でFクラスに行った。

土屋康太（つちや こうた）

2―Fクラス

ムツツリーニという別名がある。

ムツツリ商会を開いている。

島田美波（しまだ みなみ）

2―Fクラス

姫路と共に明久に理不尽な理由で暴力を振るっている。

姫路瑞希（ひめじ みずき）

2―Fクラス

Aクラス並みの学力はあるが、明久が勉強していたと知らず、Fクラスにいった。

明久がAクラスと知ったとき、明久がカンニングをしたと思っっている。

霧島翔子（きりしま　しょうこ）

2―Aクラス代表

優子の親友。

雄二のことが好き。

工藤愛子（くどう　あいこ）

2―Aクラス

優子の親友。

久保利光（くぼ　としみつ）

2―Aクラス

優子のライバル。

明久のことが好き。

佐藤美穂（さとう　みほ）

2―Aクラス

根本恭二（ねもと　きょうじ）

2―Bクラス代表

小山友香（こやま　ゆうか）

2―Cクラス代表

平賀源二（ひらが げんじ）

2―Dクラス代表

清水美春（しみず みはる）

2―Dクラス

美波のことが好き。

中林宏美（なかばやし ひろみ）

2―Eクラス代表

三上美子（みかみ よしこ）

2―Eクラス

須川亮（すがわ りょう）

2―Fクラス

F F F 団のリーダー。

横溝浩二（よこみぞ こうじ）

2―Fクラス

F F F 団（エフエフエフだん）

2―Fクラスの団体。

女子にモテないから、女子にモテる、一緒に歩くなどの行為をしたやつを異端審問会

にかける。

西村宗一（にしむら そういち）（別名：鉄人）

文月学園の教師。補修担当。

生徒は鉄人の補修が怖いと思っている。

藤堂カヲル（とうどう かをる）

文月学園の校長。

雄二や明久などからは「ババア、妖怪」と呼ばれている。

眞実

優子 side

秀吉とお母さんに何かを隠されていることを知った後の毎日、アタシの耳には授業もなにもかも入らなかつた。秀吉がアタシに隠していることが気になる。

正直、分かつている。よくないことだろうと。

でも、知りたい。知って楽になりたい。

何だろう。転校？ 病気？ 病気だったら何だろう。

もしかして… アタシは…

「… 子さん、優子さん！」

「ふえ？」

誰かに呼ばれた。周りを見ると、となりに1人のバカそうな男の子がいた。

えつと… 誰だっけ？

「あんた誰？」

失礼だけど聞いてみた。

「優子さん、その質問、すでに4回目だよ？」

そうだっけ？聞いた覚えがない。

「僕は吉井明久だよ。」

そうだった。吉井くん。FクラスからAクラスまで上がった子だ。

「それで何？」

今の私は機嫌が悪い。だからそっけなく用を聞いた。

「……後で屋上に来てくれますか？」

そう聞かれた。まあ、暇だからOKと言っておいたけど。

……でも何でだろう。吉井くんと話していた時、とても不思議な気分になった。今まで感じたことのない気持ちだ。

その後、言われたとおり、屋上に行ってみたら、すでに吉井くんが待っていた。

「あの……優子さん……」

なんだか吉井くん、落ち着いていない。どうしたんだろう。

「僕は優子さんのことが好きです。付き合ってください！」

いきなり告白された。実際、恋に興味はなかった。でも吉井くんの告白は何故か嬉しい。

「……こちらこそよろしくお願いします。」

勝手に口が動いた。でも、多分、アタシはそのままの事をどつちにしろ、言ったと思う。でも何かを忘れていている気がする。

告白の後、アタシはお家に帰った。

家にはお母さんがいた。そこで思い出した。

ずっと聞きたかったことを。

「お母さん、何を隠しているの？」

お母さんはその質問を言ったとたん、見たことのないほどの悲しい顔をしていた。

しばらくしたら、お母さんは答えた。

「本当に聞きたいの？」

アタシは覚悟を決めていた。

「優子ちゃん。あなたは病気なの。その病気は世界でたったの6人しか持っていないの。それは、骨が溶け、記憶をなくしちゃうの。そしてあなたはもう長くは生きられない。あなたに残された時間はあと4ヶ月なの。」

アタシは絶望した。

別に死ぬのは怖くない。

でも記憶を失ってしまう。

過去の記憶も、これからの記憶も全て消える。

死ぬだけなら、これからの時間を大切に過ごせばいい。

アタシの場合、記憶は消えてしまう。

なら、何のためにこれから生きればいいのか。

それしか頭を横切らなかつた。

優子の気持ち

優子 side

あの日からアタシの世界は灰色になった。

放課は一人ぼっちで屋上で青い空を見るようになった。

この世界にはもう長くはいられない。

そう、アタシは記憶と共に消えてしまう。

それなら思う存分変わらない青い空を見よう。

もう他に、思い残すことは無いんだから。

「心配事があつたら力になるよ。」

明久くんはそれを毎日言ってくれている。

アタシはいつもありがとうと答える。

でも、今日はそう答えなかった。

どうせいつかは言わないといけない。ならいつそのこと言っちゃおう。

アタシは全て明久くんに話した。彼はびっくりしていた。

「優子にとって最高の4ヶ月にしてあげる。」

優しい彼はそう言ってくれた。

「優子、一緒にお昼食べよう。」

明久くん、愛子ちゃん、翔子ちゃん、久保君、秀吉、Fクラスの坂本君と土屋君と屋上で食べたりにするようになった。

他にも一緒に勉強会をやったり、楽しいことをたくさん。

そう、明久くんは教えてくれた、消えてしまう記憶でも大切な時間だと。

でも、あの時の私はこの4ヶ月に同じぐらい悲しい事が起きることを、予想さえしなかった。

優子 side out

とある2人 side

「またアキ、Aクラスの女子と仲良くしている。ウチらというものがありながら……」 O☆S I☆O☆K Iよ。」

「明久くん、あなたには私達がいるのに……」 O☆S I☆O☆K Iです。」

「でもどうやってO☆S I☆O☆K Iするの?」

「私にいい考えがあります。実は……」 (かくかくしかじか)「

「それいい!これでアキもウチらだけを見てくれるわ。」

「そうですね。これなら明久くんも私達だけを見てくれます。」

「覚えておきなさいよ、アキ。行こう、「瑞希」。」

「はい、分かりました。「美波ちゃん」

二人は残酷なことを考えた。1人の女子生徒に聞かれていたとも知らずに……………」

とある二人 side out

とある団体 side

「吉井また女子と仲良くしやがって。あいつにはきついO☆S I ☆O ☆K Iしないと。我ら「FFF団」はそれを許さない。やるぞ、野郎ども！」

「イエッサー、「須川隊長」！」

とある団体 side out

とある二人の話を聞いていた女子生徒 side

「酷い……………ただの嫉妬で……………これはまずいわ。明久くんが危ない。すぐに誰かに知らせないと……………」

その少女は駆け出した。

この話を聞いていたとある女子生徒 side out

強化合宿の怪しい影？

優子 side

「もうすぐ強化合宿か〜」

一人で呟いた。

楽しみだった筈の強化合宿なのに何故か変な予感がする。

「はあ〜」

自分の声が部屋で響いた。

今日は誰も家にいないから、余計嫌な気分。

「楽しいと良いんだけど……………」

優子 side out

島田さん side

「もうすぐ強化合宿よね、瑞希。そろそろ計画の用意をしないとダメなんじゃない？」

ウチが瑞希にそう言った。

実際、計画を行わないと、アキはあの木下とかいう性格の悪い女とずうっと一緒にいるんだわ。

こうしないといけなくなったのはアキ、アンタのせいなのよ。

アンタに本当にふさわしいのはウチと瑞希なんだから。

島田さん side out

姫路さん side

「そうですね、美波ちゃん。」

私はそう言った。でも、美波ちゃんは築いていなかった。

あの時、計画の話をしていたあの場所で、全てを聞いていた「Aクラスの女子生徒」がいたことを。

でも、今はあの女子生徒はいない。パーフェクトな機会ですわ。

「美波ちゃん、計画を変更しますよ。」

「はあ!? どういうこと? アキを許しちゃうの?」

美波ちゃんは驚きを隠せていないみたいです。そりやあそうですよ。

「違います、美波ちゃん。あの時、あの場所で、全てを聞いていた女子生徒がいたんです。それが明久くんの耳に渡ってしまったら、ダメでしょう?」

西村先生にまで知れ渡ってしまったら私達はおしまいですよ。

なので、計画を変えて、あの女子生徒を悪者にしてしまえばいいんです。」

「どうやってあの女を悪者にするの、瑞希?」

美波ちゃんが質問した。

「明久くんの優しさを利用するんです。」

仮に、あの女子生徒がペラペラ喋っても、明久くんは、私達を信用してくれます。」
「なるほど。」

「そして、FFF団も協力させるんです。」

「?????」

美波ちゃんがびつくりしています。

「FFF団も明久くんにO☆SI☆O☆KIしようとしているんです。」

それなら一層の事、協力してやった方がいいかと思えます。」

「なるほど!!これなら大丈夫!!確実な必勝法だわ!!」

「凄いや瑞希!これならアキを連れ戻せるわ!」

美波ちゃんが納得してくれました。

そうです。この計画で明久くんは私達のほうに向いてくれるはずです。

元々、あなたにふさわしかったのは私と美波ちゃんです。

木下さん達ではなくて、私達があなたの「本当」のお友達です。

この計画で、あなたはそれに築き、また私達と仲良く仲良くするべきなんです。

それは、あなたにとっても、私達にとっても、一番なんですよ。

